クエーク　クリップ　クリック

～Quake Clip Click～

完結版

作・加賀屋　淳

【登場人物】

斎藤健雄　秋田に住む会社員、その他男の役

杉浦凛子　仙台に住む建築家の卵、その他女の役

【場所】

仙台と秋田市

そして、神戸市須磨区

【プロローグ・男の過去】

客入れ音楽が終わっても明かりが入らない。
舞台中央、暗い中でうごめく二人。明かりは入っていないから、人数も分からないけれど…。

男　押すなってば！　滑るっ！　滑る！
女　もうちょっとずれてよ。
男・女　うわぁっ！
女　風強―い。
男　飛ばされるよ!!
女　だからつかまえててって言ってるでしょ。
男　つかまえててもいいけど、足滑らせたら、道連れだよ。
女　今更、何言ってるのよ。ここまで来たら、死ぬまで一緒です。
男　ヒロミさん、うれしい一言だけど、この極寒の状況だとその言葉のありがたみ半分。寒ぅっっっ！
ヒロミ　きれい…。でも、やっぱ寒いね。

男　やっと気付いた？ 車に戻る？
ヒロミ　あ、それはイヤ。せまいもん、軽トラ。狭いより寒いの選ぶわ、私。
男　会社から貸してもらってるんだ。これで貯金出来てるんだ。贅沢言うなって。
ヒロミ　チッ。だいたい軽トラにタケちゃん乗ってるって時点で広くないから。
男　ウルセェ !!

…。

ヒロミ　あったかいんですけど。
男　あ、そう？ よかったじゃん。
ヒロミ　じゃなくって、あったかいんですけど、頭。
男　だから何。
ヒロミ　嗅いでるでしょ。あたしの頭の匂い。
男　ダメ？ 落ち着くからさ。
ヒロミ　斎藤健雄、変態臭い。
健雄　ダメ？
ヒロミ　うん、どっちかっていうと。

健雄　あっそ。

ヒロミ　…やっぱ見えないわ。帰ろ。

健雄　助かったぁ。

ヒロミ　タケちゃん…ランタン。

健雄　うん。

ハンドランタンをつける。ぼんやりと男と女の顔が見える。
女の首には赤いマフラーが巻かれている。
男は女の後ろに立っている。

健雄　毎週ここにきて夜景見てるけど、なにかあるの？

ヒロミ　街の光…。

健雄　街の光？

ヒロミ　あの茨島から新屋にかけて…わかる？　あの辺り。

健雄　…真っ暗で、よくわかんねぇ。それに雪降ってるし…。寒っ…。

ヒロミ　そのちょうど真っ暗なあの辺りの街路灯とか街の明かりをね、きれいに整備出来ないかって。ほら、4月に美術工芸短大ができるじゃない。

健雄　ああ、コンクリート打ちっぱなしのあの建物。

ヒロミ　そう。そういう美術系の大学ができるんだからさ、街自体も奇麗にライトアップして、光のアートが印象的な街づくりができないか、って。秋田大橋も新しいく掛け替えられるって言うし。今うちの会社で、秋田市の都市計画案に盛り込んでもらえるよう提案しようかって企画してて。

健雄　へえ。ヒロミの会社、そんなたくらみがあるんだ。

ヒロミ　プロジェクトと言いたまえ。キミ。

健雄　ハイハイ。

ヒロミ　大学で勉強した都市環境研究がようやく自分の生まれた街で活かせるって考えただけでドキドキする。きっときれいだよ。茨島の工場から秋田大橋そして新屋の町が光の帯でつながるの。それがきっかけになって秋田市全体にこの光の帯が連なっていくのよ。

健雄　でも寒いよね。

ヒロミ　その光の帯の中にはタケちゃんが作った建物が整然と立ち並ぶのよ。

健雄　うちの会社住宅建設中心だもん。

ヒロミ　社長、一級建築士なんでしょ。地図に残る建物とか作ればいいじゃん。

健雄　うちは、設計とか実際の工事は外注だし営業だけの会社みたいなもんだから。効率よく建物建てるっていうかさ。

ヒロミ　あー、おもしぇぐねー。ちっちぇー男。あたし離婚すっかなぁ。

健雄　なにや、その言い方っ !!

ヒロミ　タケちゃん。ちょっと…。

ヒロミ、健雄の顔を引き寄せ、キスをする。

ヒロミ　できた。タケちゃんのベイビー。3カ月。

健雄　えっ !! ええっ!…こんた寒いとこいたらだめたべ !! はやく家帰ろう。

ヒロミ　うん。だけど、しばらく夜景見られねじゃん。だから、街全体の夜景、記憶しとこうかって思ってさ。

健雄　ヒロミ。よがったぁ…。

と、ヒロミを抱きしめる健雄。

健雄　どっち似かなぁ。

ヒロミ　女の子だったらアタシ似。この顔(健雄の顔を軽くたたいて)で女の子だったら、ちょっと将来キツイかも…。

健雄　はぁ !!

と、

健雄・ヒロミ　ハ、ハ、ハ、ハクション !!

…。

健雄　「あの冬の大森山から七カ月。待ちに待った臨月。予想もしない時間が私たちに訪れた。」

そこに心拍モニターの音が聞こえる。

ヒロミを演じていた役者の口調が変わって…、

看護師　あ、ご主人？

健雄　はい。電話いただいて、飛んできたんですけど。

看護師　奥さま、急にお腹の痛み訴えられて。今、緊急手術を行っています。

健雄　え!! どういうことですか？

看護師　早期胎盤はく離です。

健雄　どんな状態ですか？

看護師　奥さまは、予断を許さない状態です！

健雄　奥さまって？…赤ちゃん…、子供はどうなんですか？

看護師　…。

健雄　子供はどうなんですか！

看護師　…。奥さんも赤ちゃんも、今一生懸命戦ってます。私たちもとにかく最善を尽くしていますから。とにかく待合室で！

健雄　どうか助けてください!! お願いします、おねがいします！

看護師、走っていく。

落ち着かず、ただ祈るだけの健雄。

健雄　長かった。時間がこんなにゆっくりと流れるものとは思わなかった。一分、一秒が、数時間、数十分のように感じた。祈るというより、もはや、自分の命を手術室で戦っている妻と子に見えない管を通して押し込んでいる、そんな感じだった。

…、

看護師。

健雄　…。

看護師、健雄と目が合う。一瞬うつむくが、すぐに視線を後ろに遣る。

何かが後ろからやってきたようだ。

健雄　え。これ…どういうことですか。…ヒロミ、ヒロミぃ。なに寝てんだよ。赤ちゃん抱っこしなきゃいけないだろう。…これ…。赤、ちゃん…。

看護師　女の子、でした…。

健雄　（妻の乗っているストレッチャーの脇を凝視し）…え？…（ハッとして）…俺に、俺に、そっくりだ。どこからどう見ても…俺の子だ…。あまりにそっくりで…、笑っちゃうくらいだ…。

泣き崩れる、健雄。

健雄　俺は失った…。子も、妻も、そして妻の夢もすべて…。外は雨が降っていた。1995年8月。自宅へ向かう軽トラのカーラジオからは神戸の震災復興が少しづつ進んでいる、というアナウンサーの声が流れていた…。

1．【チクショウ、あのアマ！人をなんだと思ってやがる !! 】

健雄　以来、私は、前向きに生きることをやめた。死ぬのは怖かったので、自らの命を絶つことはしなかったが、もし、楽に死ぬことができるのなら、そして、妻と子供に会えるのならば、死んでもいいか、とそんなことも考えるようになっていた。
独り残されて 15 年が経とうとしていた、2009 年春、私の心に小さな波が立った…。

明かりがすこし変わると、舞台中央のテーブルに健雄役の役者が急に崩れ込む。
バックには藤あや子の〝こころ酒〟が流れている。
酩酊。ホジなくなっている健雄。くどく絡む。

健雄　しかしながら、酒を飲んで酔っ払うときだけは氷のように固く冷たくなった心が融けているようなのである。
女店員　（健雄じゃない別の客に）ありがとうございましたぁ。またねー。
健雄　…じゃあ行きますよ、いいですか、いいですか、はい、カンパーイ…

隣に目配せする男。一緒の飲み客がいるようだ。

今年の楽天は何でこう強いかね。おお、飲んで飲んで！　なんたってスタートダッシュが良かったからね。ヨーイ、ドンでドゥワーーーって首位独走でしょ。…いや、いまは今はちょっと、ちょっとだけ乱れてますよ。ライオンさんとかハム屋さんとかに抜きつ抜かれつしてますけどね、まあ、飲んでよ。5月になったらきっと安定した首位を維持しますよ。我々にはマー君がいるんだから。「神様仏様田中様」。ノムさんもうまいこと言うねぇ。俺なんかあんなうまくボヤケないからね。「飲む前にノム！」…ほら、シーンとしちゃったよ。飲んで、ほら。…カラ？　…(店員に)すみませーん、生、(連れに)…生中でいい？　(もう勝手に決める)いいな。生中二つ。

女店員　はーい。ちょっとまってくださーい。

健雄　…は、「原ジャイアンツ」だ？　バカタレ！そりゃね秋田は意外と楽天ファンは少数派ですよ。ジャイアンツファン多いですよ。タイガースファンにはかないませんよ。でもね、それは表向きであってさ、実際一皮むけば、みーんなみーんな落合が好きでさ。…あ？　あれ？　オレ何言ってんだ。あ、ね知ってる、オレ、落合と同窓ですから。高校が。秋田工業高校。オレ？…オレは建築科。そうそうA科A科。でなきゃ建築会社に勤めねぇって。

女店員　おまちどうさまでしたぁ。
健雄　ねねねね、おねぇさん、どこ。
女店員　は？　なんすか？
健雄　高校どこ？
女店員　あたしっすか？　お客さん、しらないすよ、きっと。秋田じゃないから。
健雄　大丈夫、わかるって。
女店員　無茶言うっすね。…常盤木学園高校（ときわぎがくえんこうこう）。知らないでしょ。
健雄　あ、仙台出身？
女店員　え、知ってるんすか？
健雄　音楽科あるとこでしょ。
女店員　わ、この人ヤバ。なんか、あんた女子高生マニアの人？
健雄　いや、ちょっと最近知り合った人がそこ出た人でさ。
女店員　ますますヤバ。店長呼んでこよ。…はい？

健雄の連れの男が何か言っている風。女店員と健雄が男のほうに目をやる。みるみる女店員の顔が変わっていく。

女店員　（健雄に）ハハハ、この人（連れ）面白いこと言うっすね。（連れのほうを見て）常盤木じゃこんなおバカキャラ女、あたしだけっすから。（健雄に）すんません、こいつシメていいっすか !!

と、連れにくってかかろうとする女店員をとっさに羽交い絞めにする健雄。

女店員　すんません、ここでやらなきゃ、ここでやらなきゃ、あたしを生んでくれたママに申し訳立たない！…こっのぉ！腹の立つうっっっっ !!

健雄　まあまあ。…あ、そうだ…生酒五本と、あと比内地鶏串焼き盛り合わせ二人前、よろしくぅ〜！

女店員　ハゥッハゥッハゥッ…。まいどあざっす。

はうはういいながら、女店員引っ込む。

健雄　（連れに）今抱えてる男鹿の物件、仙台の設計事務所に依頼しててさ。今回図面引いてる設計士ってのがさっきの話に出てきた〝常盤木学園高校〟出身なのよ。なんだか、妙に頭良くってさ彼女。…そう、女の子の設計士。今年で 27 とか言ってたな。ぶっちゃけ、こいつがいちいちウルセェ

んだ。「この建坪だとこの部屋数は取れません、これはわたしにはできません」って。…ほれ、飲め。…四月から始まったばっかりで、もうこっちはぐったりだよ。んでさ、うちの社長最近ｗｅｂ会議システムっつうの導入してさ。パソコンにカメラ付けて相手の顔見ながら外部の会社と打ち合わせするんだよ。こんな秋田のちっちぇー会社でなに大企業みでぇなごとしてんだ、っていう話よ。これもまた困りもんなんだけどよ…。たとえばさ…、

♪ピコン、ピコン、ピコン。

この電子音に今までの泥酔模様から、一気にシラフになって…、

ちょっと離れた上手奥目のデスクに場所を移す健雄。

真ん中のテーブルを中心にした反対側の位置のデスクに若い女が浮かび上がる。お互いのデスクの上にはパソコンがある。

健雄　（超気弱に）あああ…。

女　斎藤さん、おはようございます。

健雄　お世話さまです。凛子さん、今日は…早いですね。

凛子　すみません、“杉浦”でお願いします。用件言います。船木邸の改築の件です。

健雄　一階の壁に入れる筋交(すじかい)いの件ですか？あれは予算的にも厳しいんで本数は…

凛子　それは絶対だめです。耐震補強の面から考えても絶対譲れません。秋田沖には地震の空白域があるそうですから。

健雄　建物は進化してます。今はみんないい建築金物を使って丈夫に出来ています。安全はそこで担保されています。

瞬間、凛子の表情が険しくなるが、すぐに持ち直して、

凛子　とにかくダメなものはダメです。今日は別の話です。施主さんのチェックシート開けますか？

健雄　…あ、今…今、開きます。

もたつく健雄。イラつく凛子。かなりもたつく健雄。かなりイラつく凛子。
「あっ」とか「すみません」を連発する健雄。
シビレを切らして…、

凛子　（ボソッと）ああ、ドンくさ。（口調を変えて）いいです。1階の居間なんですけど、施主さん、何人世帯でしたっけ。

健雄　えっと…、旦那さんと、奥さんと、おばあちゃんとそれから、高校生の息子さんと…、

凛子　（話を断ち切るように）だとすればこれは広すぎです。４人世帯では広くても８帖です、普通。

健雄　あ、えっと、船木さんのお宅は、年末になまはげが立ち寄るお宅で、…あ、なまはげ知ってますか、あの鬼のお面で…

凛子　（突然超ドスを効かせて）「なぐ子はいねがー」。知ってます。そのくらい。

健雄　…あ、よかった。そのなまはげ目当ての観光客も受け入れてるんですよ、船木さんのお宅じゃ。その関係でこのくらいの広さがないと…、

凛子　（また遮るように）とはいっても年に一度のイベントですよね。

健雄　「イベント」って…。

凛子　なにか？

健雄　え、いや。…でも「なまはげ」は秋田の大事な観光資源でもありますから…。

凛子　それは私の設計とは何の関係もありません。私の提案が受け入れられないとお考えでしたら、別の設計士に依頼されたらどうですか。

健雄　（ぶつぶつと）オレだってそうしたいけど…

凛子　なんですか？

健雄　あ、はい。施主さんと相談してみます。

凛子　お願いします。…あ、それと…、髪。

健雄　カミ？

凛子　立ってます。寝ぐせ。アンド、ネクタイ、曲がってる。

健雄　スミマセン…。

と直す。

凛子　カメラをつけたこういうシステムの目的は、見る、見られるという意識を持ち対話をすることで、緊張感のある営業活動を推進する、という目的もあるんです。そのあたり、自覚してください。社長にもその点伝えてください。では。

プチン。

健雄　…なんだよ。…まるで俺が…悪いみたいじゃないか。…はい！　あ…いや、なんでもありません。ちょっと独り言。…あ、はい…すみません…反省…し…。

「アーッ！」と健雄と凛子、ともに大きなため息をつく。

凛子　何言ってんだ、あたし。

凛子の脳裏に、さっきの健雄のセリフが再びフラッシュバックする。

健雄の声　建物は進化してます。今はみんないい建築金物を使って丈夫に出来ています。安全はそこで担保されています。

重なるように、

関西弁の男の声　…昔とは違う。建物は進化してる。今はみいーんなええ金物使って丈夫に出来てる。安全はそこで担保されてるんや。それが技術っちゅうもんとちがうか

かなり、いら立っている。机をたたいたりしている。

凛子　安全の担保ってなによ！　そんな金具任せ、モノ任せで安全の担保だなんて…。

と、そこに凛子の上司が現れる。

上司　…どうした。

凛子　…。

上司　(パソコンをのぞいて)例の秋田の案件か。あまり神経質になるな。気を使うんだったらもっと別のところに使ったらいいんじゃないか。どんな高邁(こうまい)な理想があったって、どんな素晴らしい図面引けたからって、それが形になって、客の満足に応えられなきゃそんなプライドなんてクズみたいなもんだ。もっと賢く生きてみろ。大きくなれないぞ。杉浦君、ちょっと出かけてくる。

凛子の肩をもんで出ていく上司。

凛子はその感触を払しょくするように肩を手で激しく払う。

頭を抱える凛子。そこに女の子の声。

女の子の声　あたしな、あのぼろっちいうち、なんとも思ってへんよ。ハラボジとハルモニが焼肉

屋やって苦労して建てた家やもん。贅沢言うたらバチ当たるわ。ハハハ。

…。

凛子　ヘジャ、あたし…潰れそうやわ。

暗転。

明転。

仕事中。椅子に腰掛けカリカリしている健雄。

なにやらぶつぶつ独り言を唸っている。基本的に健雄はいつもぶつぶつ言っている。

と、そこに電話のベル。

女性事務員の声　斎藤さん、電話ですよぉ。

健雄　はい…何番…ですか…。

女性事務員の声　一番ですよお。

健雄　あの、電話切れてますけど。

女性事務員の声　あ、そうですねー。

健雄　…ああ。…どこからでしたか？

女性事務員の声　男鹿の船越さんからです。じゃあ、あたし帰りますから。帰りの戸締りおねがいしまーす。

健雄　フナコシ…あっ！　船木さん！(少し焦って、)

電話をかけなおす健雄。

健雄　あ、船木さん、山王建設産業です。先ほどは失礼しました！　お電話の件は…あ、はい。納戸の位置？…はい、ちょっと今図面出しますから。

図面を出す健雄。

…えっと…、あ、二階の北西の角にあるのが納戸です。…え？　書いてない？…ああ、これ「ウォークインクローゼット」って書いてある、ここがいわゆる納戸です。…はあ、ですね。…はい。わかりました。書き直します。あとはどこか…。ああ、大丈夫ですか。はい。あ、じゃあ、直した図面、もう一回出します。…明後日、持っていきますので…。すみません。どうも。（電話を切る）…。

再び電話に向かう健雄。

と、そこに、

♪ピコン♪

健雄　あ、杉浦さん。
凛子　こんばんは。どうしたんですか。なに笑ってるの？
健雄　男鹿の船木さんの案件で、確認したいことがありまして。連絡をとろうとしたらちょうど杉浦さんから今…。
凛子　あ、そうだったんですか…。で？
健雄　いや、杉浦さんからどうぞ。何か用事あったんでしょ。
凛子　この間のこと、謝ろうと思って。
健雄　何のことですか？
凛子　この間、ずいぶんひどいことを言っちゃったなって…。
健雄　どういうことをですか？
凛子　なんか、自分の理屈ばっかり押しつけちゃって…。
健雄　…。
凛子　…？
健雄　…あ、ごめんなさい。どんなこと言ってましたっけ。
凛子　…はい？
健雄　いつも押しの強いお客さんやら上司相手に仕事してるもんでそういう感覚鈍くなっちゃっ

てるんです。ハハハ。

凛子　あきれた。

健雄　すみません…。でも、案外、しおらしい所あるんですね。

凛子　そんなんじゃなくて、これは礼儀です。

健雄　そうですか。

凛子　なにニヤついてるんですか。

健雄　この顔は生まれつきです。

凛子　絶対違う！　明らかに笑ってる !!

健雄　…はい…確かに笑ってしまいました…。ごめんなさい。

凛子　…。

健雄　ん？

凛子　そんなに簡単に謝らないで、もう少し「ちがう」だとか突っぱねてもいいんじゃないですか？

健雄　そうです…ね。でもわたし、大きな声出したり、事実を否定するの、二十代に置いてきちゃいましたから…。

凛子　それでよくこの業界生きてきましたね。

健雄　へへへ。すみません。

凛子　ほめてないですよ。

パラパラ…、と音が聞こえる。
健雄、外に目を遣る。

健雄　あ、傘忘れてきた。
凛子　はい？
健雄　雨、降ってきちゃいました。そちらお天気はどうですか？
凛子　…ああ、降ってます。仕事してたから全然気づかなかった…。
健雄　近いから、そんなに天候も違わないのか。

健雄、外に目を遣ったまま。

凛子　いつも遅いんですか？
健雄　はあ。営業ですから。いつお客さんから連絡があるか分からないし。…杉浦さんこそ、お帰りの時間じゃ？
凛子　もうじき帰ります。
健雄　そうですか。

…。

凛子　あ、なにか用事があったんじゃ…。

健雄　…あ、そうでした。船木邸の図面の記載内容なんですけど。

凛子　ちょっと待ってください。

凛子はマウスを動かし、データを呼び出そうとする。一方健雄は紙の図面を出す。

健雄　船木邸の二階北西の角のウォークインクローゼット。ここの表記を「納戸」にしてくれないかって…。

凛子　…それだけ？

健雄　はい。以上です。

凛子　部屋の広さを変えろ、とか位置を直せとかじゃなくて？

健雄　はい。部屋の名称を変えろ、と。

凛子　言葉は違うけれど同じ意味だっていう説明じゃだめですか？

健雄　お客様のご希望ですから、私はそれに誠心誠意応えるまでで…。なんたって、営業ですから。

凛子　…。

健雄　…いいですか。

凛子　…はい。

健雄　あの、ちょっと伺っていいですか。

凛子　はい？

健雄　杉浦さん、紙の図面使われないんですか。

凛子　ああ、私の仕事は設計だから、こういうやりとりが多い関係で、社内で仕事するときはパソコンのCAD（キャド）データで対応してます。

健雄　そうですか。さすが若い人は違うなぁ。私、高校のころ製図機使った製図が好きだったんでどうしても紙の図面でないとしっくりこないんですよ。使いませんでした？　製図機。

表情が硬くなる凛子。

凛子　学校でちょっとだけ習いましたけど、大学ではほとんどキャドでしたから。

健雄　そっか、大学出てらしたんですね。大昔の高校の建築科卒とは違うんですものね。…あ、皮

肉とか他意はないですよ。誤解しないでください。

凛子　気にしてません。

健雄　子供のころ近所に高校生のお兄さんがいましてね、彼、学校行くとき必ず図面の入ったプラスチックの保管筒を肩にひっかけて出かけていくの見てて、ああ、かっこいいなぁ、なんて。結局その憧れる気持ち一心でそのお兄さんと同じ高校の建築科に入ったんですけど。自分の保管筒を持った時ほんっっとにうれしくてね。立派な建築士になれるようにがんばろって思いました。ま、いまは建築会社の図面も引くことのない営業マンですけど。

凛子　斎藤さん、結構話す人なんですね。もっと寡黙な人かと思ってました。

健雄　普段は静かなもんです。ここのところ、あんまり人と話すのが苦手になってきて。今日は杉浦さんにうまく乗せられました。

凛子　いや、そのつもりはないけど…。

健雄　あ、私が勝手に話してただけか…。

凛子　ご自宅にお帰りになったらご家族いらっしゃるんでしょ？

健雄　…いません。一人もんです。

凛子　(聞こえるか聞こえないかくらいでつぶやくように)…ひとり。

健雄　(意識的に時計を見て)あ、杉浦さん、私からの連絡は以上ですが、ほかにはなにか？

凛子　あ、ああ。ありません。じゃあ、部屋の表記直して、データ送っておきます。

健雄　すみません。よろしくお願いします。

凛子、ちょっと疲れている風。

健雄　…杉浦さん、大丈夫ですか？

凛子　大丈夫。お気になさらず。

健雄　…季節の変わり目ですからお気をつけて。

凛子　すみません。…あの。

健雄　…。

凛子　船木さん、どうして改築されるんですか。今のご自宅もなまはげの観光客を受け入れるくらい、そこそこ立派な構えなのに、わざわざ建てなおすなんて。

健雄　息子さん、来年の春、高校卒業したらご実家に残って家を継がれるんだそうです。で、先々のこと考えて、古い家を直して若い人の住みやすい家にしようか、って。孝行息子に親心です。じゃ、そろそろ…。

凛子　はい。お疲れ様です。

健雄　…でも、

凛子　はい？

健雄　これも(ネットカメラシステム)、なかなか面白いもんですね。ついつい話し込んじゃいました。では、失礼します。

凛子　では…。

ログオフ。

健雄　さてと、帰るかな。

凛子　そろそろ帰ろ。

健雄・凛子　保存保存、フフフ…。

健雄は図面を保存筒に入れて、凛子はパソコンのマウスを動かして、それぞれ図面を保管・保存する。

二人とも窓の外らしきあたりを見ている。

健雄　雨…、

凛子　止むかな…。

雨の音が一層激しくなって、暗転。

3．「淀み・6月上旬のとある日」

暗い中、雨の音。ぼんやりと健雄が浮かび上がる。

健雄　あれから半月ほどが過ぎた。例の船木邸は設計図もあらかた完成し、後はどういう内装にするかどういった機材を入れるか、という選定の段階になっていた。只今、雨の中、営業の帰りである。

クルマ(軽トラ)の音。ワイパーが動き天井を雨が打っている。

カーラジオから…、

ラジオパーソナリティー　雄和の「味噌づけガッコ母さん」からのメールです。『かまちゃん、こんにちは。きょうはあいにくの雨だけれどもがんばっていきましょう。』そですね。なんだかすっきりしない天気だけどね。頑張っていきましょう。『雨の後は田んぼに草生えてくるのでまた草取りの心配しなきゃいけないのですが、今日はマックスバリューに行って買い

物してきました。今日は安かったので、つい買いすぎてしまいました。リクエストします。仮7級の「軽トラドライブ」お願いします。』ということで、母さん、今日はあど、ゆっくりして体休めてください。はい、じゃあ、雄和の「味噌づけガッコ母さん」からのリクエスト、象潟の女子デュオ・仮7級の「軽トラドライブ」いきましょう。

仮7級の「軽トラドライブ」がかかる。

健雄

酒以外に、自分を解放できるのが、この軽トラ・ダイハツ・ハイジェットの車内。かれこれ15年乗り続けている。もうあちこちガタがきているが、馴れればまた心地いいもんである。社長の特別の配慮で半分私用にも使わせてもらっている。ガソリンは半分自分持ち、維持管理費は会社持ちだから、うちの家計は大助かりである。おかげで給料はしっかり貯蓄に回すことができているのだ。…え？　独り身で何のために金ため込んでるか、って？…独身って意外と大きな夢を持ってるものなのよ‼ ちなみにこれ、「軽トラドライブ」っていう曲。私、斎藤の遠縁の親戚の子が出した曲。この軽トラってところがツボなんだよなぁ…。うわっとあぶねぇ(とハンドルを切る)。

会社に到着。

クルマを降りる健雄。
会社に入ろうとするが、鍵がかかっていたりする。
鍵を開けて会社に入る。入って早々、パソコンを立ち上げる。

健雄　ただいまぁ…。(テーブルのメモを見て)『仙台・設計事務所の杉浦さんから連絡がありました。』か…。

電話をかけようとすると、♪ピコンピコン

健雄　…あ、お世話様です。連絡いただいていたようで。今ちょうど電話しようとしてたところで。
凛子　こんばんは。雨模様ですか。
健雄　そちらも？
凛子　いえ、こちらは曇り空です。髪。
健雄　あ、またいつぞやみたいにハネてますか？
凛子　いえ、濡れてるから。
健雄　すみません。(と手ぐしで髪を整える)今日はなにか。

凛子　ちょっと相談に乗ってほしくて。

と、涙ぐむ凛子。

健雄　あわわわ、どうしました！

凛子　ごめんなさい。ちょっと不安定で…。

健雄　気にしない気にしない。気持ちが不安定になることなんてよくありますから。

凛子　…ありがとうございます。

さらにうるうるくる凛子。

健雄　ああ、もう泣かないでください。会社、どなたかいらっしゃらないんですか。

凛子　一人で残業中だったもので…。

健雄　もうこんな時間なんですものね。最近すっかり日が長くなってきましたから、仕事がしやすくなってきました。

凛子　あ、お疲れでしょう。…今日は遠慮しておきます。

健雄　全然かまいません。外回りから帰ってくるといつもこんなもんです。

凛子　クルマでまわられてるんですか？

健雄　はい。っていっても営業車、軽トラですけど。ハハハ。クルマであちこち回るのも結構楽しいものですよ。

凛子　疲れません？軽トラ？

健雄　ああ、慣れですね。当然のように毎日乗ってるんでむしろ大きい車に乗ると気疲れして。

と、軽く笑顔を浮かべる健雄。つられて凛子も笑顔に。

凛子　お仕事ご一緒して二ヶ月経ちますけど、最初のころとずいぶん印象変わりません？

健雄　そうですか？　私はなにも変わった感じはしないけど。…少し心が打ち解けてきたんですかね。

凛子　そうかもしれない。

笑いあう、二人。

健雄　で、相談の向きって…。

凛子　この間、こんなことがあったんです。

一瞬暗転。

明かりがつくと、凛子が一人パソコンに向かって仕事をしている。

そこへ上司が図面を持ってやってくる。

上司　杉浦君、ちょっと。

凛子　はい。

上司　これなに？

凛子　泉のモデルハウスの新築案件です。

上司　わかってるよ。なんでこういう直し方するの、って。

凛子　いただいた図面だと、縦方向の力には強いんですが、特にここの梁の位置が弱いので横方向の力が加わると、倒壊する恐れがあります。そのためにはこの南側の窓を小さくして、このように筋交いを入れて…、

上司　バカたれ！俺が君に頼んだのは、この家の内装のチョイスだって。この窓は外観を考えてデザインした、この家の目玉なんだよ。…もう家自体の基礎やら骨組みは俺が仕上げたんだから。君が手出すのは100年早いよ。

凛子　でも住む人の安全が…、

上司　生まれ故郷でどういう経験してきたかわかんないけどさ、二言目には耐震強度がどうだとか、基礎がどうだ、筋交いの数がどうだ、って。しまいには手厚いバリアフリー対応の家だって？

凛子　…。

上司　このモデルルームは、ただのモデルルームじゃないことはわかってるよね。デザインコンペの予備戦っていう意味合いがあるんだよ。

凛子　…。

上司　それを、こんなやぼったい設計にして。うち辞めて、田舎の神戸で設計事務所でも開いたらいいじゃない。向こうだったら、それはそれは安全ないい家で評判になるだろうよ。

凛子　…。

上司　気分悪い。出てくる。…あ、今日戻んないから。

と、図面を机に叩きつけて出ていく上司。

再び現在。

凛子　どう思います？　私間違ってますか？

健雄　杉浦さん、鼻っ柱、強いですね。私にはそんな芸当できません。

凛子　真剣に聞いてください。

健雄　聞いてます。でもね、わたしあなたの上司の気持ちわかります。…杉浦さん、阪神・淡路大震災の経験者ですか？

凛子　…はい。

健雄　私も前に耐震建築のフォーラムに参加したことがありましたが、震災を経験した建築士さんはことのほか耐震強度を充分にとった建物のあり方を力説されました。

凛子　やはりそれって震災被害の教訓でしょ？

健雄　それはその通りです。でも、それにがんじがらめになると建築士のもつ独自の感性や豊かな発想の転換を妨げることになるんじゃないんでしょうか。

凛子　はっきり言います。斎藤さん、あなた何にもわかってない。阪神・淡路大震災では、その施工方法が倒壊、半壊、軽微な被害の明暗を分けたんです。…特に在日の方々の住居の中には…、

健雄　杉浦さん、今日はやめませんか？　疲れていないとは言ったものの、やはり外回りは疲れるんで。今はあなたと耐震設計のことで激論を戦わせる気持じゃありません。

凛子　逃げるんですか？

健雄　…はい。逃げます。逃げるのもまた危険回避の一つです。

凛子　逃げる…。

健雄　逃げられずに降りかかってきた身の不幸は、ある意味…自業自得だと思います。

凛子、激昂する。

凛子　斎藤さん、あんた何言っとう !! その発言は…、

健雄　なんとでも言ってください。…ごめんなさい。この件は私が口を差し挟むことじゃないから。

凛子　…。

健雄　わたしが役に立てる事あったらなんでも言ってください。できる範囲でお力になるように頑張りますから。近くに行って慰めてあげる事は出来ませんが。

凛子　どうしてですか？

健雄　近いって言っても秋田と仙台ですから。

凛子　そうですか…。

凛子、急に顔色が変わる。自分自身をきつく抱きしめるようにして、泣いている。

健雄　十五年前の私だったら、あなたの愚痴に話を合わせて、そしてなりふり構わず仙台に飛んで行って抱きしめでもしたでしょうけど。この年になるとそんな気も薄れてきましてね。

凛子　そんなことは期待していません。誤解しないでください。御自分を買被りすぎなんじゃないですか。

健雄　違います。これが年を重ねた、ってことです。あなたはまだ子供だ。

凛子　…。

凛子、震える手でパソコンの電源を突然切る。

健雄　どうしたんでしょう…。あー、トイレトイレっと…。

と奥へ消える健雄。

暗転。

4.【親友・鄭　恵子(チョン・ヘジャ)・6月22日】

ぼんやりと明かりが入ると健雄が立っている。

健雄　冷静に振舞っていたつもりだったが、私の心の底に小さく付いた傷口から、濁った血のようなものが滲み出て、杉浦さんを攻撃してしまった。特に仕事の劇的な進展もなかったこともあって、彼女とのやり取りは途絶えていた。連絡が再開するまでの間、彼女がどんな思いを抱えて胸を痛めていたのかは、その後彼女の口から聞くまでは知ることはなかった…。

去る健雄。

とそこへ、いかにも仙台っぽい〝歌謡曲〟(たとえば〝青葉城恋歌〟とか…)が流れる。

そこに凛子がやってくる。マスターが奥からやってくる。

マスターが看板を小さな看板を掛ける。

看板には「牛タン定食　タンタカたがじょう」とある。看板の体裁は全く牛タン屋ではない。むしろフレンチレストラン風。

マスター　Bonsoir!! Bienvenue. Allons-y!

マスターの前に凛子が座る。

マスター　りんりん、疲れてるねぇ。なに飲む？

凛子　水。

マスター　Oui. Merci。定食でいい？

凛子　うん。あ、タン焼き三人前で。

マスター　Merci…今日ちょっと早いんじゃない？　早引け？

凛子　今日ちょっと静かにごはん食べたいんだ。

マスター　…Excusez-moi….

凛子　…。

マスター　…。

妙な沈黙に耐えかねて、マスターは何か話しかけようとするが、凛子の雰囲気にちょっと躊躇する。

凛子　マスター、
マスター　Oui!
凛子　…日本酒の冷や。コップで一杯。
マスター　…いいの？
凛子　いいの。
マスター　はい。

と、言うが早いが、コップ酒が出てくる。

凛子　（満面の笑みで）メルシー！
マスター　…リンリン、すぐに焼きあがるから…、お願い。
凛子　なに。
マスター　…寝ないで…。
凛子　なんで寝なきゃいけないのよ。

と一気にコップ酒をあおる凛子。…即落ち。テーブルに突っ伏している。

マスター　早っ…。

あきれ顔のマスター。

が、突然凛子がむっくりと起き上がる。

マスター、少しひるむが、「いつものこと」のような雰囲気ですぐに態勢を整える。

凛子　…マスター、ごめん。お酒やっぱりやめときゃよかった…。ここで3日立て続けでつぶれちゃ、さすがのマスターでも怒るよね、やっぱ。

マスター　いえ。どんなに酔っぱらっても、ちゃんと残さず飲んで食べて、そしてキッチリおあいそしてくれれば。

凛子　マスター、わたしカワイイ？

マスター　なんかあった？

凛子　なんにもないわよ。それはそうと、わたしカワイイかって訊いてるの。

マスター、凛子をのぞきこんで、

マスター　うん。カワイイ。しかもかなり上のほう。
凛子　うまいなぁ、マスターも。あたしみたいな小娘を狙ってどうすんのよ。
マスター　狙ってなんかいないよ。単純にビジュアルはいいな、っていってんの。
凛子　ほら、見た目や。男はすぐこれや。それになによ「ビジュアル〝は〟」って。
マスター　なんだよ、せっかくほめてやってるのに。
凛子　見た目と中身っていったらどっちとる？
マスター　やっぱりなんかあった？
凛子　なにもないって。答えてよ。どっち？
マスター　…中身。
凛子　言うと思った。男ってすぐにこれやもん。
マスター　仕事でなんかあったんだろ。
凛子　…うん。デザインをとるか、安全性をとるかで社長とぶつかっちゃって…。私はもう少し補強したほうが耐震性能が高くなる、社長はこれでいいって…。
マスター　それで見た目と中身なんて話になったんだ。
凛子　そう。
マスター　俺なんか今「もし香椎由宇が根性最悪だったらどうしようか」って真剣に考えてた。

凛子　頼むから、牛タン真剣に焼いて。
マスター　Oui. でもさ、そのデザインって、柱がないとか、基礎がないとかダンボールで壁作ってるとか、そういう話じゃないでしょ。リンリンちょっと神経質なんじゃないの？
凛子　マスターまでそういうこと言うんだ。どんなに見た目がよくても、地震ですぐ倒れたり、台風で屋根が吹っ飛んだりしたらって想像したらいたたまれないもの。家って人間の命を守る殻のようなものでしょ。
マスター　安心・安全ってのは、提供する側と提供される側とじゃ求める安全性が違うからね。…BSEでさんざん振り回されたからなぁ。
凛子　あ、あったあった「狂牛病」。
マスター　こっちが徹底的に安全なものを調達していたところで、お客様がその安全性を納得しなければそれは「危険な可能性を大いに孕んだもの」なわけだしね。
凛子　人の口に入るものだし。
マスター　建築の仕事もそうだよな。安心して住むことができてこその家だし。
凛子　去年の岩手・宮城内陸地震の後しばらく、お客さんから「お宅で設計してくれた我が家は地震で倒れたりしないだろうな」って問い合わせがひっきりなしだった…。話変わるけど、マスターどうして牛タン屋さんはじめたの？
マスター　仙台の高校出て市内のレストランで働いてたんだけれど、そこの師匠が「フランスに渡

ってフレンチの修業してみねぇか」って。

凛子　で、行ったの？

マスター　Oui! パリには 10 年いた。中身はすっかりフランス人になったと思ってたんだけど、

凛子、「中身はフランス人」がツボッたらしく、笑いをかみ殺すのに必死。

マスター　何か？

凛子　続けて。

マスター　ある日、無性に牛タン焼が食いたくなってね。タンシチューに使う材料が余っちゃったもんだから、それで、まかないにタン焼きつくって食べたらそのうまいことうまいこと。もう次の日から田舎の多賀城とタン焼の夢交互に見るようになって。「タン焼き、多賀城、タン焼き、多賀城、タン、多賀城、タン、タン、多賀城、タン、多賀城…」ちょうど 10 年目に帰ってきちゃった。で、帰ってきて開いた店の名前が「タンタンたがじょう」ハハハ。

凛子　マスターのタンシチュー絶品だもんね。

マスター　Merci!!

凛子　あ、それでフレンチ風なんだ、ここ。

マスター　この店の原点だから、タン焼きの中で唯一フレンチメニューのタンシチューを入れてる
っていうわけ。

凛子　…幼馴染に、焼肉屋さんやってるうちの子がいたの。チョン・ヘジャって言ってね、在日の
三世でその子のお爺ちゃんの代から続いてる焼肉屋さん。その子の家地震で全壊しちゃった。

マスター　ほう。神戸の？

凛子　そう。

マスター　最近は帰ることあるの、神戸？

凛子　…ううん。

マスター　帰りたくないか。

凛子　そういうわけじゃないけど…。マスターじゃないけど、震災で死んだ親戚やら友だちの顔が
代りばんこで夢に出てきて…。最近ちょっとそれが頻繁で…。

マスター　…おまちどうさま…定食、タン三人前…。

出された定食をまじまじと見ている凛子。

凛子　なんであたしだけ生き残ったんだろ。生き残ってもこんなモヤモヤずっと抱えて…。

マスター　…さあ、温かいうちに召し上がれ。
凛子　いただきます。

一口、ぱくつく凛子。

マスター　どう？
凛子　おいしい…。ありがとう、マスター。
マスター　Je vous en prie!　それでいいじゃん。おいしいものが食べられる幸せ。
凛子　…。
マスター　俺たちは結局、誰かの命の存在があって初めて生きていけるんだから。人間もそう。もっと広い意味で言うならば食べ物もしかり。要はその誰かの命の存在を自分の先生にして、心の片隅に置いて忘れないことが、必要なんじゃないかな。
凛子　うん。
マスター　突っ張って行きゃいいじゃない。誰が何と言おうと、隕石が降ってきてもブッつぶれないくらいの頑丈な家設計するくらいの気持ちでさ。無理しないでもっと自分に正直に生きてみたら。
凛子　うん。

マスター　じゃあ今日は特別、タンシチュー、サービスすっか!!

と、マスター、奥へ引っ込む。

凛子　サンキュ…、あ、メルシィー!!…ヘジャ、ありがとうね。

暗転。

5．【裂け目・8月10日】

暗い中で、ドキュメント番組の記者リポートのような音声が流れる。

番組の声

『…昨年六月十四日・午後八時四十三分。岩手県内陸南部で発生した「岩手・宮城内陸地震」。この震災から一年経った被災地には未だ完全な復興とは程遠い風景が拡がっています。最大震度6を記録したここ宮城県栗原市。青いビニールシートで覆われているものの、その隙間からは壊滅的打撃を受けた家屋が無残な姿をのぞかせています。「安らかな生活はいつ訪れるのか…。」住民からは悲痛な叫びが聞こえます。今の被災地の様子をリポートしました…。

リポートにかぶさるように途中から、明かりが入る。健雄が電卓を叩いて積算資料を作成している。かなり真剣。外はこの日も雨…。

とにかく、もくもくと電卓を叩き、資料に何かを書き込んでいる。

書いては訂正し訂正印を押したり、分厚いファイルを引っ張りだし、仕事をしている。

そこに件（くだん）の女性事務員が現れる。帰り支度の風。手には傘を持っている。

女性事務員　ああ、雨だー。やだぁ…。

健雄　…ええ。

女性事務員　いつ止むと思います？

健雄　…そうですね…。

女性事務員　…。

健雄　…。

女性事務員　聞いてます？

健雄　…はい…。

女性事務員が、健雄のパソコンを覗く。

女性事務員　ああ、男鹿の船木さんとこの積算ですか…。

健雄　…。

女性事務員　この物件の図面引いてる仙台の設計士、あれってなくないですか？

健雄　…ええ。

女性事務員　全部、電話とパソコンで用事済ませちゃって。仙台からだったら来てもいいのにって思うんだけど。…そう思いません？

健雄　…うん。

女性事務員　斎藤さんも行ったらいいじゃないですか、仙台。行って通えない距離じゃないんだし。泊まんなくても日帰りで行けるでしょ。

健雄　…ええ。

女性事務員　なんか、彼女の口ぶりだと斎藤さんのこと警戒してるみたいなんですよね。なんか変なことしちゃったんですか？

健雄　…ええ。

女性事務員　うそっ！　何したんですか？それって嘘ですよね？

健雄　…ええ。

女性事務員　…。

健雄　…。

女性事務員　（少しムッとして）3576439855132906879601 29…。

健雄、ふと顔をあげて、

健雄　私、意外と妨害には強いんですよ。ごめんなさい、こっちに集中してたもんだから。

と、冷静に電卓に表示された数字を資料に書き込む。

女性事務員　おもしろくなーい！　こんなときって、なんかパニクって〝うぁぁぁ〟とか言わないんですか？

健雄　そういうキャラクター、二十代に置いてきました。

女性事務員　出た！斎藤さんの〝二十代に置いてきました〟発言。二十代になにがあったんですか？

健雄　何にもないですよ。普通の二十代。

女性事務員　酒におぼれて、女性関係が乱れていたとか？

健雄　普通の二十代は酒におぼれて、女性関係が乱れるものなんですか？

女性事務員　だったらすごいなーって。

健雄　だったら？

女性事務員　おもいっっきり軽蔑します！　男女問わず男の話や女の話ぐちゃぐちゃ言ってわけわかんなくなってる奴なんか、「お前、アホか！」って思っちゃいますもの。

健雄　若いですね。なんかあったんですか？
女性事務員　…なんもないですよ。（ふとテレビをみて）…うわぁ…これ、宮城県の栗原ですよね。こんなんじゃ人住めないじゃん。こういう災害で家がつぶれたときって、うちみたいな建築会社の責任って問われるんですか？
健雄　うーん、地震の規模にもよると思いますけど、被害の状況から明らかに設計ミスとか工事の手抜きじゃないかぎり、施工業者の責任を問うのは難しいんじゃないかな。まずは、災害に耐えられる建物をつくるのが我々の仕事だと思いますけど。
女性事務員　うー、かっこいい！　見直しちゃう !!
健雄　（ちょっと照れる）
女性事務員　やっぱりやめときます。
健雄　どうも…。
女性事務員　…斎藤さん、結婚しないんですか。
健雄　…そうですね。よくわかんないです。
女性事務員　好きな人いるんでしょ？
健雄　どうかな。
女性事務員　またあ、隠しちゃってぇ。
健雄　隠してないですよ。一人のほうが気楽で。

女性事務員　昔付き合った彼女とすっごい悲惨な別れ方したとか？…ハハハ！

健雄　え？

女性事務員、健雄の語気の強さにちょっとひるむ。

女性事務員　冗談ですってば！　マジで怒んないで下さいよ。いや、あたしも先月彼と悲惨な別れ方しちゃって。

健雄　…。

女性事務員　私より年下の女の子好きになったんだって、カレ。結構食い下がったんだけど、結局あたしが引いちゃった…。

健雄　…そうだったんだ。

女性事務員　ま、いいけど。あたし、若いっすから！

健雄　そうね。

女性事務員　…あたしとか、どう思います？　好きになったりとかします？

健雄　いきなりすごい質問ですね。

女性事務員　あ、勘違いしないでくださいね。例えば、っていう話ですから。

健雄　ああ、残念だな。

女性事務員　そういう冗談言うんでも全然気持ち入ってないし、斎藤さん。
健雄　…。
女性事務員　四月の飲み会の時みたいな感じだったら、あたし斎藤さん、結構いけるんだけどな…。
健雄　どういうことですか？
女性事務員　あの日の斎藤さんってすごいムードメーカーだったし、話は面白かったし、歌なんかもバンバン歌ってうまかったし。
健雄　ごめんなさい。あの日の事全く記憶がなくて。
女性事務員　もしかしてお酒入ると別人になります？
健雄　…かもしれませんね。ははは。
女性事務員　笑い事じゃないですよ。普段と全然違うんだもの。マジ、ここ(自分のこめかみのあたりをつついて)きつかったら、心療内科とか行ったほういいですよ、絶対。
健雄　ありがとうございます。(外を見て)…あ、雨あがりましたよ。
女性事務員　あ。…じゃあ、あたし帰りますから。帰りの戸締りおねがいしまーす。あ、そうだ…、

と引っ込んで、はがきを持って再び女性事務員登場。

女性事務員　(健雄にはがきを渡して)営業車両の軽トラ、来月車検ですから。

健雄　はい。

女性事務員　斎藤さん、あの軽トラそろそろ廃車にしたほうがいいんじゃないですか。社長のワンボックスあまってるんだから、あれ使ったらいいじゃないですか。しっかり元(もと)とったと思いますよ。第一危ないし。

健雄　いや、私、好きなんですよ。いろいろ思い出もあるし。苦労を共にした戦友みたいなもんですからあの軽トラ。

女性事務員　フフフ。変な人。じゃ、お先に。…あっと、忘れてた。

女子事務員、持っていた大きな封筒を健雄に渡す。

女子事務員　さっき話に出てきた仙台の設計事務所の杉浦さんから珍しく図面送られてきましたよ。彼女こんなアナログ的なこともできるんですね。それと、中に入ってる名刺見てくださいよ。

健雄　なに?…あ。

女子事務員　ね、この名刺の写真、満面の笑み。ブロマイドじゃないんだからこの笑顔はないですよね。やっぱり変わってる人だわ、この人。

健雄　…いや、案外いいかも。…ふふ。

女子事務員　何ですか？

健雄　…死んだ妻にちょっと似てたもんで。

女子事務員　え…そうだったんだ…。ごめんなさい！…「悲惨な別れ」とか無神経なこと言っちゃって…。じゃ。お先に…。

健雄　はい。お疲れさまでした。

女子事務員、帰る。

しばらくテレビをつけっぱなしにしていたが、テレビを消す。

が、あまりにも静かでちょっと不安な様子の健雄。

健雄　「悲惨な別れ」…ヒロミ…。

ぼんやりとする健雄。ふと外に目をやる。

雨が強くなっている。

一方に凛子が浮かぶ。意志を感じる表情。

健雄、パソコンに手をかける。

パソコンのチャイム♪ピコン、ピコン。

凛子、驚いて、

凛子　はい、杉浦ですが。…ん？　あ、斎藤さん。ご無沙汰してます。

…。

凛子　もしもし。…聞こえますか？　斎藤さーん !!

反応が鈍い斎藤。度重なる凛子の呼びかけにようやく気付き、はっとする。

健雄　すみません！　まちがってログインしました。ごめんなさい。

と、ログオフしようとする。

凛子　ずいぶん、お疲れのようですね。

健雄　すみません。じゃ。

凛子　斎藤さん。ここのところずっとメールのやり取りだけですみません。お変わりありませんでした？

健雄　はい。特に。…あの、いつぞやはずいぶん失礼なこと言いました。ごめんなさい。

凛子　あ…、全然気にしてないから。こんなんだからよく言われるんです、あたし。…台風、近付いてます…ね。

健雄　はあ…。もう、関西…、あ、兵庫、結構被害出てるようですね。

凛子　ええ。あたしもさっきからニュース見ててなんか、やりきれなくなって…。

健雄　…死ななきゃいいですよね。

凛子　え？

健雄　人、死ななきゃいいですよね。

凛子　そりゃそうですけけど。どうしたんですか、調子でも悪いんですか？

健雄　災害でさ、人が死んでいくの、たまんないよね。

凛子　…？

健雄　私たちがどんなに心血注いでも緻密な設計のもとに家を建てても、災害で一瞬にしてダメになっちゃうこともあるんですよね。

凛子　だからこそ、家を建てることにかかわる私たちの仕事は、究極は人の命と健康、そして財産を守ることだとあたしは思ってます。

健雄　建築基準法第一条ですか…。杉浦さん、まじめですね。

凛子　ばかにしてます？

健雄　いや、決してそういうわけじゃ。でも人智が自然の脅威に及ばないっていうことなんてざらじゃないですか。

凛子　ちょっと…、何言ってるの。

健雄　ひどい災害なんて、突然人が死んじゃうんだよ。夕べ一緒にごはん食べてた人が今日はもういなくなったりするんだよ。

凛子　どうしたんですか…。

健雄　この台風でも誰か死んじゃうのかな？

凛子　…。

健雄　ねぇ。なんか言ってよ。いつもみたいに強気で否定してくださいよ。「そんなことはないです」って。

凛子　…。

健雄　人を救えないってつらいことですよね。目の前で死んでいく人に何の手助けもできないで見殺しにして逃げていかなきゃならないつらさとか、それから…それから…

健雄の言葉に、顔が硬直してくる凛子。

凛子　つらいのは…あなただけじゃないから。
健雄　じゃあ、あなたは私に何してくれますか。
凛子　…。
健雄　なにもできないでしょ。…どんなに私が苦しもうが、なにもできない…なにも。

凛子の表情がどんどん硬くなっていく。

凛子　…甘ったれたこと、言わないで。あたしだって…

健雄、ログオフ。
健雄が消える。凛子だけ残っている。

凛子　…ほんとは…苦しいんだから。

ぼんやりと、凛子だけが浮かび上がる。

凛子

この日の台風は兵庫県内でも20人の死者を出すほどの災害となった。あれから2カ月。この間、言いようのない霧のようなものがいまだに私と彼の心を支配していた…。しかし、私はこの霧が近いうち晴れるような気がしていた。確たる証拠はなかったけれど、何となく…。

すばやく暗転。

6.【反発と引力】

暗い中で「オイダの歌」を呟くように歌っている健雄。
ぼんやりと浮かび上がる健雄。酔いつぶれているようだ。
テーブルの上にはエコバッグが乗っていて、中には缶の酒やらつまみが入っている。
自分の体をさするようにして泣いている。

健雄　もう疲れた…。ヒロミぃ…会いたいよ。おまえんとこ行きたい…早く…。

と、突っ伏す。
健雄の後ろにヒロミが立っている。首にはあの赤いマフラーが巻かれている。
健雄の隣に座って、健雄の飲みかけの缶ビールを飲んでいる。

ヒロミ　うまっ !!　何これ。

と、一気に飲み干すヒロミ。さらに袋に手を突っ込んで、

ヒロミ　うわぁ、こんなのもある！

と、新しい缶に手をつけ、ゴクゴクとやるヒロミ。

ヒロミ　15年も経つとこんなおいしい物もできるんだぁ…。

そして、突っ伏している健雄の背中をたたいて、

ヒロミ　タケちゃん！　しゃきっとしなさいしゃきっと。あんた、いつからそんな情けない男になったのよ。

健雄　…ヒロミ?!

ヒロミ　そうにきまってんじゃん。

健雄　どうしたの？　なんで来たの？

ヒロミ　自分で呼んどいて何よその言い草。会いたいって言うから来てあげたんじゃないよぉ。

健雄　迎えに来てくれたの？…。

ヒロミ　あんたね、恋女房を死神みたいに言いなさんな。ちょっとハッパかけに来ただけ。用が済

んだらとっとと帰りますからぁ。

健雄　一緒に連れてってくれよ…。

凛子　だからあたし死神じゃないってば。それに忙しいのよ。年明け、エレーヌ、高校受験だし。

健雄　エレーヌって？

ヒロミ　あたし達のこどもに決まってんじゃん。あ、言ってなかったね。ごめん、相談する機会なかったから勝手に名前決めさせてもらった。いい名前でしょ、エレーヌ。女の子らしくて。

健雄　あっちの世界でも高校受験あるんだ…。

ヒロミ　あたし達の世界はこっちのことにかまってられないくらい結構忙しいのよ。だから、あんまりあたし達のこと呼んだり、あたし達のところに行きたいなんて言わないでくれる？…ただでさえ秋田県出身者は前触れもなく勝手にやってくる人多くてものすごい迷惑だ、って評判悪いんだから。

健雄　…なんか、どうしたらいいか全然わかんなくなっちゃって。

ヒロミ　何がわかんないの？

健雄　それがわかんないんだ。何のために仕事して、何のためにお金貯めて、何のために生きてるのか。

ヒロミ　そんなの意識してたら疲れるだけ。早死にしちゃうよ。

健雄　…なんか妙に説得力あるな、ヒロミが言うと。

ヒロミ　なんてったって死んだ人間ですから。
健雄　ここ、笑うところ？
ヒロミ　タケちゃんに任せる。
健雄　…フフ。

おつまみを取り出しパクつくヒロミ。

ヒロミ　…こんな美味しいもの飲んで、食べれて…何が不満なのかね。「死にたい」なんて贅沢過ぎるわ。あたしたちは、あれやっときゃよかった、これ忘れてきたぁって思い残したっぷりでこっちに来ちゃったってのに。
健雄　ごめん。
ヒロミ　…。
健雄　…。
ヒロミ　…でも、正直嬉しかった。タケちゃん、15年もあたしのこと忘れないでいてくれれて。
健雄　あたりまえじゃん。恋女房なんだもの。
ヒロミ　ありがと。だから…そろそろ自分の幸せ考えてもいいんだよ。死んだ人間に思い煩わされずに。ってか、幸せになってほしいんだ。…タケちゃんのこと、…好きだから。

健雄　ありがとう。

と、ヒロミの手を握る健雄。

ヒロミ　きっとこうやってタケちゃんのぬくもりとかやさしい気持が必要な人がきっといると思う。私のことはお盆とお彼岸と命日の三回くらい思い出してくれれば、それで充分だから。

ふと、机の上にあった凛子の名刺を見つけ手に取るヒロミ。

ヒロミ　ははは。この子、笑ってる。…ん？　この子、何となくあたしに似てる？　…あ、そろそろ帰んなきゃ。

健雄　帰っちゃうの？

ヒロミ　エレーヌそろそろ塾から帰ってくるころだから。

健雄　あの世でも塾ってあるんだ。

ヒロミ　受験なんて、こっちが本場なんだよ。知らなかった？

健雄　ホント？

ヒロミ　うん。「受験地獄」っちゃってな。…お後がよろしいようで…。

と、消えようとするヒロミ。
引き留めようとする健雄。

健雄　ヒロミ！

ヒロミ　いま、かかってくるよ。電話。じゃあね。…この色男がぁ !! あ、このビールもらってくね。

と発泡酒片手に消えるヒロミ。
とそこにケータイがなる。

健雄　はい、斎藤ですが。

凛子の声　夜分遅い時間にすみません。いまいいですか？

健雄　はい。なにか緊急の用ですか？

凛子の声　一度、こちらにおいでになりませんか？ 打ち合わせも兼ねて。

健雄　え！ いやあ、打ち合わせといっても、もうあらたか設計は煮詰まって、そろそろ着工の段階ですから…。

凛子の声　こうやって一緒の仕事してて一度も顔合わせしてないって、おかしいし…。

健雄　いや、私は大丈夫…

凛子の声　ちょうど紅葉もいい頃だし、来週あたりどうですか？　あ、うちで設計した宿泊体験出るモデルハウス、使えますから、泊まりがけで。あ、来週の3日の土曜日、十五夜ですよ。仙台の月見にいらしてくださいよ。「萩の月」用意して待ってますから。あ、待ち合わせですけど、フォーラスって知ってます？あそこの前で待ち合わせしてそれでうちの事務所にご案内します。あたし車持ってないから、あ、斎藤さん、車で来られますよね。乗せてくれません？だったらちょうどいいし。それともご飯、先に食べます？　あ、秋田何時に出てくるかにもよりますね。よかったら、晩御飯の時間に合うように来てもらえれば。あ、よく行く牛タン屋さんあるんですよ。「タンタンたがじょう」っていう。なんだかフレンチレストランんッぽいんですけど、結構牛タン焼の味はよくって…

凛子の電話の声の途中あたりあたりからかぶるように、

健雄　とにかく一方的だった。今までの彼女に対してのイメージには全く存在していないキャラクターが電話の向こうにあった。私はただただ彼女の勢いに圧倒され、彼女が仕向けけること

をまるまる受け入れることしかできなかった。この翌週、10月3日・土曜日。私は彼女と会うことにした。

暗転。

7．【凛子と健雄、二人の長く深い夜】

フォーラス前に立っている凛子。
近付いてくる健雄。

健雄　…どうも、お世話さまです。
凛子　あ、お世話さま…いや、こんにちは…あ、そろそろ「こんばんは」、か。
健雄　こんばんは。
凛子　本当に来てくれたんですね。運転、疲れたでしょ。
健雄　いや、全然。仕事だと思えば。
凛子　そっか…。(健雄を見て)…こんな人だったんだ。
健雄　実物まずいでしょ、やっぱり。
凛子　いや、ほら、いつもパソコンのディスプレイのこんなちっこいウインドウで顔のあたりしか見たことなかったから…「ああ、こんな感じの人やったんかぁ」って。
健雄　来ないほうよかったかな。
凛子　ううん。あたしすごく会ってみたかったから。

ちょっとの沈黙。

場が持たなくなって、

健雄・凛子　あの…。

凛子　あ…、どうぞ。

健雄　あ…、とりあえず、メシでも。

凛子　…その前に、夜景、見に行きませんか？

健雄　夜景？

凛子　月並みだけど、青葉山に…仙台城址。

健雄　ええ。ご一緒します。

凛子　ナビするから、乗せてくれません、クルマ？

健雄　ええ。…『フォーラスからちょっと行った駐車場まで歩いた。別段大した会話もなく。まさかクルマに乗せろと言われるとは思ってもみなかったから、「山王建築産業」と会社の名前の入った軽トラを目の当たりにした瞬間の彼女の反応を想像しながら、ただ「笑われなきゃいいな」ということだけを考えていた』

そして駐車場。軽トラの前。

『何らかの反応があるかと思っていた予想に反して、彼女の反応は全くなかった…。』

行きます…か。

凛子　はい。

軽トラ発車。

カーステレオからは仮7級の曲が流れる。

健雄　『いつものことなので自分では全く気にしてはいなかったが、彼女は…』

凛子　この曲おもしろい。これラジオ？

健雄　あ、いや、CD。

凛子　なんていう歌手？

健雄　仮7級。秋田の若い女の子デュオ。

凛子　へえ…。

健雄　『彼女はカリナナにご執心になってしまったようで、青葉山までの道中、カリナナの曲にノリノリになっていた。軽トラに女性と乗るのは妻以来だし、妻は軽トラに乗るのを極端に嫌っていたから、あっさり軽トラに乗って、しかも助手席でノリノリになってくれている姿に、私の緊張の糸はみるみるほどけていった。…青葉山まではあっという間だった…。』

軽トラを降りるとそこは青葉山。

凛子　うわぁ、きれい。十五夜かぁ。

健雄　これからどんどん寒くなっていくんだな…。

凛子　(健雄をちらっと見て)どうかしました？

健雄　妻と 15 年前、秋田で夜景を見ました。秋田市の夜景を見下ろせる大森山というところで。さっきみたいに会社の軽トラに乗って出かけたのを思い出しました。

凛子　亡くなった奥さん。

健雄　はい。一月の寒い風が吹きつける山のてっぺんで寄り添いながら…。

凛子　15 年前の…一月…？

健雄　妻は妊娠していましたから、それ以来体を気遣って出かけることはしなくなりました。結局二人で出掛けたのはその寒い大森山が最後でした。

凛子　そうだったんだ…。街中に戻りましょうか？

健雄　大丈夫です、わたしは。

凛子　『この後しばらく私たちには無言の時間が流れました。…どんな声をかけたらいいかも分からずに。ただ、この人の心の中には、私と同じように時間では流しきれない思いがよどんで

いることだけは感じました。』

健雄　運命って残酷だって思いませんか。幸せの絶頂からたたき落とされるんですよ。

凛子　…。

健雄　幸せと、未来への希望を一気に奪っちゃうんですから。

凛子　…斎藤さん…。

健雄　俺、何したっていうんだよ。なんで15年もこの喪失感に苦しまなきゃならないんだよ。

凛子　…斎藤さん…。

健雄の腕をつかむ凛子。

健雄　どうせだったら、俺も一緒に殺してほしかった。どうせ生きていたって、俺を必要とする人なんていないんだから。

凛子　必要としてくれる人、いますって。

健雄　いや、いない！

凛子　そんなことないです。斎藤さんとこの社長さんだって、斎藤さんがいなきゃ山王建築産業は回らないって言ってた。

健雄　俺なんて、会社の歯車でしかないんだから。

凛子　歯車だってなくちゃほかの歯車は回らない。
健雄　俺なんかが死んでも、俺の代わりはいくらでもいるんだ。
凛子　…。
健雄　もう…もう…生きていくことに自信がないんだよ、俺 !!

凛子、健雄を張り飛ばす。そして、再び健雄の引き寄せ、頬を張り飛ばす。

凛子　生きていくことに自信がないなんて、簡単に言わないでくれる…。
健雄　…。
凛子　世の中のすべての人があなたをいらないって言ったとしても、私があなたを必要として
るの！　あなたに生きててほしいの！　もう大切な人がこの世からいなくなるのは耐えら
れないの !!
健雄　凛子さん…。
凛子　意思すら、生きたいっていう意思すら、生きたいっていう自分の希望すら剥ぎ取られた人が
いるのに…。
健雄　…。
凛子　あたしね、15 年前神戸に住んでたんだ。

健雄　そうだったんだ。一番の被災地に…。ご家族は無事だったの？
凛子　私は大丈夫だったけど、おじいちゃんとお父さん死んじゃった。
健雄　……。
凛子　結局お母さんの田舎を頼って仙台に移住したの。
健雄　神戸の実家は今どうなってるの？
凛子　瓦礫になったし、もう思い出したくないって、完全に引き払ってきた。
健雄　…ごめん、いろんなこと思い出させてしまって。
凛子　気にしないで。だから今日は…
健雄　…
凛子　震災の話、無理にでも聞いてもらうことにした。いいよね。
健雄　…
凛子　返事がないということは了解したという事で、話をはじめます。
健雄　…いや、いいよ。無理しなくても。街に戻ろう。ご飯食べに行こ…、
凛子　いいから。とにかく聞いて。今日は斎藤さんに聞いてもらうために呼んだんだから。

勢いに気圧される健雄。

凛子　お願い。しっかり思い出せるように、斎藤さん、付き合ってください。

健雄　うん。

凛子　このことから逃げ出したくないから、今だけは。しっかりつかまえてて。

健雄　わかった。

と、凛子の手を握り締める健雄。

凛子　1995 年 1 月 17 日未明。(独白のように)あの日、私はただひたすら名門中学の門を目指して、シャープペンを握り締めてノートにかじりついていた・・・。外気は2度9分だというのに、私はそれほど寒さは感じてはいなかった。母は十数年ぶりの同窓会で、実家の仙台へ。家にいたのは父と私、そして祖父。祖父は、もう休んでいた。六年前に祖母に先立たれてから、一人、離れで気ままに過していた。離れは新進気鋭の建築家と評判だった父が祖父のために設計して建てた渾身の作だった。

平成7年1月 17 日・午前5時 40 分ごろ。

勉強している、凛子。

大きなあくびひとつ。

凛子　ねむ。

と、そこへ男が出てくる。男は健雄役の男。

男　凛子ぁ、ごっつう冷えるなぁ。早よう寝なあかんで。

凛子　(冷静に)おとうちゃん、ノックぐらいして。

男(父)　ごめんごめん。…算数かぁ…。さすが受験生、がんばっとうな。

凛子　そら、願書も出したし、追い込みやもん。邪魔せんとうて！

父　…リン、まだ早いんちゃうか、受験。無理せんと、公立の中学でもええで。

凛子　あたし頑張るわ。ええ中学、高校行って、ええ大学入って、お父ちゃんみたいな立派な建築家になるんやから。

父　…うれしいこと言ってくれるなぁ…。

凛子　…。

父　…せやけどな、ええ学校入ったかて、ええ建築家になれるかっちゅうたらそうとは限らん。

凛子　…どうして。

父　昔、大学生対象の建築設計コンペに入賞したことがあってん。「入賞したで」いうてじいちゃ

んにその論文見せた。そしたら一言、「あかん。全然だめや。」

凛子　どうして？

父　「そら、学者先生が見ぃはったら、二重丸の論文かもしれへん。けどなこんな家、よう住まん。ただ体裁がええだけで、住む人の安心とか安全ちゅうもんがどっこにも書いてへん。わしやったら、こんなんペケや。」

凛子　…じいちゃんキツイなぁ。

父　でも、本当のことやった。かっこいい家、きれいな家。神戸にあって、この神戸に住むことが一つの誇りになるような、そんな家が理想の家や、って思ってた。昔とは違う。建物は進化してる。今はみぃーんなええ金物使って丈夫に出来てる。安全はそこで担保されてるんや。それが技術っちゅうもんとちがうか、ってケンカになった。

凛子　難しいな、家作るって。

父　…あ、まだ中学にも入ってへん子になんか難しいこと言うてしもうたな。お茶でも入れてくるわな。

凛子　なあお父ちゃん。

父　なんや。

凛子　建物のこと、いっぱい教えてな。

父　ああ。じいちゃんと、お父ちゃん二人かがりでいっぱいいっぱい教えたる。

父去る。勉強を続ける凛子。小休止にラジオをつける。ラジオ体操がかかっている。あわせて、身体をすこし動かす凛子。

と、突然ズドンと落ちるようなたて揺れ、黙って立っていらないくらいの揺れ。

隠れられるでも無い、どうしようもない状態。ものすごい落下音。

揺れがおさまったところへ父が入ってくる。

凛子　お父ちゃん！

父　凛子！大丈夫か？　凛子！

凛子をしっかりと抱きかかえる父。

何かが一気に噴出してきたかのように泣く凛子。

激しい嗚咽。「大丈夫や、大丈夫や！」といいながら背中をさすっている。

凛子　お父ちゃん、離れですごい音がした・・・

父　じいちゃんや！・・・凛子、動かんとき!

奥へ走っていく父。数秒後、父の声。

父　なんで離れの屋根が落ちとう！　じいちゃん！　じいちゃん！…おとうちゃん！　おとうちゃん！…おとん！　聞こえとるか！　返事してやぁっっ！

何かを持ち上げるような父の声。何度も、何度も。
窓を開ける風の凛子。呆然。

凛子　お父ちゃん…。家が、街がのうなっとう。めちゃくちゃや。向かいの浜野さんのうちも、その隣の岩井さんとこも、そのとなりの…。

さらに激しい嗚咽。
もどってくる父。放心状態。

父　あかん。むりや、じいちゃん、ぺしゃんこや。どないしたらええのんか、わからん。…

と、そこへ外から声がかかる。

外の声　杉浦さん！ 火事や！ 隣の太田さんの家、えらい燃えてる。はよう、逃げ！杉浦さん！・・・
凛子ちゃん！ お父ちゃんいてるか！ 凛子ちゃん、逃げよう！ おじいちゃんも連れてな！

父　…凛子、逃げるぞ、避難や。はよう、支度せぇ。

凛子　なにいうてんねん！ おじいちゃん助けなぁ。おじいちゃんまだ生きてる！

父　あかん、だめや。…じいちゃんの手ぇ、だらーんとしとう。

奥へ走っていく凛子。そして凛子の声。

凛子　なんで、どうしてよ。…おじいちゃん！おじいちゃん！ 大丈夫！あたしが助けたげるよ！

凛子も瓦礫を持ち上げようとしている音の様子。

父　凛子、凛子、凛子！ はよう支度せぇっ！ 逃げるで！

戻ってくる凛子。

凛子　なんでそんな殺生なことといえるん？　最後まであきらめんと助けるのが家族ちゃうん？　ね、お父ちゃん違う？

父　…逃げるで。

凛子　なんで…。お父ちゃんのアホ！　なにいうてんねん！　あたしのおじいちゃんやねんで！　あたし助ける！

父　ドアホ！　オレにとってはな、たった一人のオヤジやねんぞ！　たった一人の親やねんぞ！たった一人の。そのオレが、「逃げる」言うとんのや！　文句があるかぁっ！…いくで。

猛烈な勢いに圧された凛子。グイと父に手を引かれていく。

と、父立ち止まる。

父　…オトン。

轟音とともに梁が落ちてくる。とっさに凛子を突き飛ばす父。梁でつぶされる父。

駆け寄る凛子。

凛子　おとうちゃん！ おとうちゃん！

父　やってもうた、自分の建てた家に…潰された…ハハハ…。

父、自分を押しつぶしているものを手探りで確認している。

父　しかも…商売道具の…製図機に押しつぶされて…。足が動かへん…情けないなぁ…。

凛子　何いっとう！…(外に)すみません !!　誰か、誰かお父ちゃんを助けてください！この梁どかしてください !!

父　凛子…凛子…ええ、もうええ…。今は無理や。そのうち誰かが助けにきてくれる。それまでここで頑張るわ。…おまえは逃げぇ…。

凛子　火がそこまで来てるやない！　今逃げな死んでまう !!

父　ああ、せやったな…。凛子…。

凛子　なに !!

父　手、手ぇ…握ってくれ。

父の手を握る凛子。

父　ああ…大きなったなぁ…昔はお父ちゃんの手の中にお前の手、すっぽり入ってんけどなぁ…。今、こうしてしっかり握ってもらえるもんなぁ。…凛子、しっかり勉強して…ええ仕事…してください。

力尽きる父。

凛子　お父ちゃん、お父ちゃん !! 死なんといて、建物のこと、いっぱい教えてくれる言うたやん。おじいちゃんと二人かがりで教えたる、言うたやん !! …お父ちゃん !!

……再び、今。

凛子　頼れるお父ちゃんの近い親戚もみんな震災で死にました。住むところもない、仮設住宅にも入られん。結局、お母ちゃんの実家のある仙台へそっくり移住したの。

健雄　……

凛子　友達も死んだ。いつも仲良くして友だち。その子のうちは全壊だった。

健雄　…圧死か

凛子　ううん、その子はその数時間後に無事助け出されたの

健雄　じゃあ…自殺？

凛子　違う。クラッシュシンドローム、座滅症候群。

健雄　病気？

凛子　手足が長い時間、柱やたんすとか重いもので圧迫され続けると血が通わくなって、そこの細胞組織が損傷を受けて破壊されるの。

健雄　…

凛子　助け出されたときにはなんともなくて元気だったのに、今まで圧迫されていた部分が開放されてその損傷を受けて破壊された細胞から急激に毒素が血液で体中に送られて腎臓や心臓に極度な負担がかかる。そして最悪の場合死ぬ。

健雄　その子はその最悪の結果になったわけだ。

凛子　病院へ駆けつけたら、もうその子冷たくなっていた。でもね、それが不思議なくらいきれいな顔をしてるの。『怪我してるのが、左足だけなのに、顔も、全然怪我してないのに、どうして死んでるの』って…。

健雄　…。

凛子　…焼肉屋さんやってる彼女のお父さん、市場に買い出しに行ってて一人だけ助かった。彼女

のお父さん、天井を見つめて「アボジ、オモニ、おれたちはなんで日本に来てしもうたんや。苦しい思いして、こんな目に会うために、ここに来たんかなぁ…。」ってずっと泣いてた…。

健雄　…。

凛子　…。六千人以上の人がいろんなかたちで、いろんな思いをして死んでいった。

健雄　…。

凛子　…

健雄　…

凛子　…あたししばらく自分を責め続けた。おじいちゃんとお父ちゃんを取り残して逃げた自分を…。

健雄　…

凛子　その年の夏、あたしおとうちゃんの夢を見たの

健雄　どんな？

凛子　お父ちゃん、泣いてんねん。『おとん、堪忍なぁ、堪忍してやぁ。生きなあかんねん。凛子はまだまた生きていかなあかんねん。このとおりや、堪忍してなぁ。堪忍や、ほんまに堪忍や！　おとんの言うこと、もっとしっかり聴いとくんやったなぁ…』

健雄　…。

凛子　…。

健雄　凛子さん、ありがとう。つらいこと話させてしまった。
凛子　いいの。あたしが話すっていったんだから。
健雄　…。
凛子　…だから…お願いだから、自分はいらない存在だ、なんて言わないで。
健雄　ごめん。
凛子　十五夜かぁ…
健雄　きれいだね…。
凛子　ソウルフラワー・ユニオンの『満月の夕(ゆうべ)』って言う曲知ってる？
健雄　ごめん、しらない。
凛子　震災のあと、あたしずっと下向いて歩いてた。街灯もつかない真っ暗な道を瓦礫や道に散らばっているもの気にしてたのもあるけど、気持ちが下向きだったんだね。
健雄　うん
凛子　そんな日が続いていたある日、足元が急に明るくなったような気がしたの
健雄　…
凛子　自分の影が伸びてるのよ。空を見上げたら、雲の切れ間から、すごいきれいな満月が出てるじゃない。忘れもしない 1995 年 2 月 15 日。あの晩、「月ってきれいだな」って心のそこから感じる事が出来た。

健雄　ふぅーん。

凛子　そのころ、ソウルフラワーのメンバーがアコースティックの楽器やらチンドンセットやら三味線もって被災地を慰問して歩いてたの。あたしも何度かその演奏を聞いて元気をもらったんだ。

健雄　…

凛子　それからしばらくして、『満月の夕』って曲を耳にしたの。後日談でこの曲の出来た話を知ったら、あの2月15日の月が胸に浮かんで、ひとりでに涙が溢れてきたの。そしてらね、自然に『生きなきゃ、がんばって生きていかなきゃ』って…。お父ちゃんが夢で言ってた「生きなあかんねん」っていう言葉が、ぐっと染みてきた。

涙で咽ぶ凛子。凛子を抱き寄せる健雄。

凛子　よかった。斎藤さんと出会えて。

健雄　俺も…。

凛子、健雄の顔を引き寄せ、キスをする。

凛子　あ、お月さん、あたし達のこと、見てるわ。
健雄　…伊達政宗も…。

笑う二人。
仙台の街を見渡す二人。
健雄は凛子を後ろから抱き締めている。

凛子　明かりが灯ってるって、ええよねぇ。あの明かり一つ一つの下に人が生きてんねんで。
健雄　うん。
凛子　…生きなあかんねん…あたしたち、明日も生きていかなあかんねん。やり残した、思い残したまま亡くなっていった人に恥ずかしくないように。
健雄　…(黙ってうなづく)。

しばし、沈黙…。
そして顔を見合わせ、笑いあう二人。

凛子　…斎藤さん、船木さんの家の図面、引きなおさせてもらっていいですか？
健雄　え？　もうあの図面で契約してるし。
凛子　資材発注は？
健雄　明後日かける予定だけど。
凛子　工期は？
健雄　実は基礎に絡む工事業者の段取りがちょっと遅れてて…
凛子　じゃあ決まり。あたしの最高傑作作りますから。
健雄　…はい。わかりました。一日も早く詰めてください。お客様、待っていらっしゃいますから。
凛子　はい。…。
健雄　……『それから四ヶ月後、私の勤める「山王建設産業」は将来有望な若手設計士を迎えることになったのでした。』

【エピローグ・二人の、そしてもう一人の旅立ち】

テレビでは、阪神・淡路大震災から 15 年目のリポートが放送されている。
暗い中で、女性のくしゃみひとつ。明かりがつくとそこには一人の女性がいる。
旅支度をしているようだ。
ふと目を閉じる。ゆっくりと目を開き静かに、「満月の夕」を口ずさむ。

凛子　じいちゃん、お父ちゃん、あたしもう大丈夫だから…。笑って会いに行くから。あ…。

ふと、宙を見つめ…

ヘジャ、あんたにも会いに行くからね。みんなの事を忘れないために、あたし、しっかり生きていかなきゃね。…

ケータイが鳴る。電話に出る凛子。

「あ、お母ちゃん。…うん。さむいねぇ…これから秋田空港向かうとこ。せやから…。」

健雄が出てきて、こちらもケータイで話をしている。内容は、結婚式の段取りについてのようだ。
凛子の用意していた荷物を持つ。

健雄　凛子、いくぞ。
凛子　「またあとで電話する。じゃあね。」

と電話を切る凛子。

健雄　お母さんどうしたって？
凛子　向こうもこれから空港だって。
健雄　そっか。…ね、大丈夫、おなか？　お医者さんなんて言ってた？
凛子　順調だって。道中お気をつけてって。
健雄　ハハハ。
凛子　ハハハ。…ね、ね、練習しようか。
健雄　え、何を？

凛子　あれ！

健雄　え、またぁ!! 時間ないよ。

凛子　いいからいいから。向こう着いたらそれこそ時間がないんだから、できるときに練習しとかなきゃ。

健雄　もう、ったくぅ…。

と言いながら、二人腕を組んで立つ。凛子がウエディングマーチを口ずさみ、ゆっくり歩く。

凛子　(呟くように)…よかった。

健雄　ん？

凛子　なんでもない。…ごめんね、神戸で結婚式したいなんて言って…。

健雄　いや、おれもしっかりと見ておきたいから、凛子が生まれた街を。凛子の思いがいっぱい詰まった街を。その神戸で凛子と俺は生まれ変わって、そして、この秋田でこれから命をつないでいくんだ。

と、健雄が凛子のおなかをさする。

凛子　会社の一番忙しいときにごめんね。

健雄　何言ってんだよ、「山王建築産業」に仙台の一流設計事務所から有能な建築家を迎えることができたんだよ。それに加えて秋田県の貴重な人口1名増！

凛子　もう一人忘れてるよ。

健雄　あ、そうそう、人口もう1名増 !!

凛子　山王建築産業さんに入れていただいたからには、わたしも、ええ仕事させてもらいまっせぇ !!

笑いあう二人。

凛子　…ね、これでよかったんだよね、タケちゃん。

健雄　…あたりまえだろ。

涙ぐむ、凛子。

健雄　泣くなよぉ！こんなおめでたい時に。赤ちゃんもびっくりするよ。

凛子　…ね、あたし…ほんとうに大丈夫かな…？

健雄、凛子をしっかり抱きしめて、

健雄　…うん。俺たちのやってる「家を建てる」っていう仕事は、ただ単に建物の大きさや、美しさを誇ったり人間のステータスのバロメーターじゃないと思うんだ。家って究極の存在意義はその家に住む可能性のあるこの世の中にある命を守り育てる、母親の体のようなものじゃないかなって思うんだ。…俺たちにはお互いにこれから、守りそして愛していかなければいけない命が増えた。その命を守るような思いで「家を建てる」という尊い仕事を天職として受けたと思って行かなきゃ。

凛子　なくなっていったたくさんの命が残してくれた教訓を無駄にしないためにもね。

健雄　うん。じゃ、いこっか。

と、頬に軽くキスをして女の荷物を持つ男。笑い合う二人。男が女に背を向けた瞬間、女は頬を片手のひらでぬぐって、男の背中になすりつける。

健雄　何しやがった？

凛子　愛情表現 !!

と部屋を出ていく凛子。

健雄　はぁ？

と言いながら凛子の後を追う健雄。
本当にゆっくりと溶暗。
「満月の夕」が流れて・・・、

おわり